

日本政治学会 会報

The JPSA News

No. 3

May 1982

歓迎パーティで言わなかった挨拶

丸山真男

正確な日時は記憶にありませんが、キッシンジャー氏が国務長官のころ、ある演説で「北大西洋同盟諸国および日本は」云々と言ったことがあります。私は内外の学者から、お前はどれも日本の特殊性ばかり強調する、と、いって批判されるごとに、このキッシンジャーの言葉を思い出すのです。「および日本」！ ずいぶん不自然な表現ではありませんか。NATO諸国は一くりにされ、北大西洋とはおよそ地理的連関性のない日本だけが地球上あまたある国のなかから名指しでビックアップされ、「and」の一語でNATO諸国と結びつけられるとは……。むろんこういう表現を「不自然」というのはためにする言挙げであって、キッシンジャー氏が実質的に意味していることは私にも誰にも分ります。けれども私達はたまにはこういう表現に接してオヤという気持を起してもいいのではないかと、思うのです。同じことを言いかえるならば、たとえば「来るべき先進国サミット会談への首相の出席」云々というような新聞記事の場合には、キッシンジャー氏の場合のような言葉の揚げ足取りをする余地はないのですが、いわないだけにかえて私達がそういう記事を平然と読みすごすことによって、そこに隠蔽されている問題——世界における日本の位置の不可思議さ——が意識ののぼりにくいような気がします。

国際会議とか国際セミナーに出席する日本人が、すくなくも大多数の日本人がその度に言語の障害の問題を感じさせられるのは御承知のとおりです。けれども言語の障害とは何でしょうか。それは私達日本の学者がもっと外国語——とくに英語、ついでフランス語——に強くなることによって、あるいはサイマルの養成しているような有能な同時通訳者がますます有能になることによって「克服」されるような障害でしょうか。そういう考え方には、コトバというものほどに流通してもそれを育

んで来たカルチュアを背中に貝殻のように背負っているという宿命の自覚が乏しいのではないかが気になります。

したがってベラベラと西欧語を駆使できる人の場合ほどそういう盲点を露呈する傾向があります。これまたお前のコンプレックスではないか、という反問を承知のうえで、私はそのことにこだわりたいのです。

ここにひそむ問題には相互性があります。日本の研究をしている若い外国人学者にますますベラベラと日本語をしゃべれる人が殖えて来ました。それはいうまでもなく歓迎すべきことで、一般論としては日本研究の水準は高まるにちがひありません。けれどもそのことを認めてもなお、私はそういう日本学者に往々見られる「他者感覚」の欠如もしくは減退から生れるある安易さをおそれます。その安易さはまさに私達日本人のなかに戦後とくに、たとえカタコトでも英語をしゃべり、また——これは知識人の場合は戦後にかぎりませんが——抽象語や学術用語をはじめから本来の日本語の意味によってでなくて、言葉の背後の外国語を予想しながら日常自然に駆使している、という事情によってますます助長されるのです。

私は数年前に、George Astonの“A History of Japanese Literature”を再読して、昔読んだときに覚えなかったような感銘を新たにしました。記紀万葉から、明治後の蘇峰や露伴にまで及ぶこの概説書が「世界の文学」のシリーズの一巻として出たのは日露戦争以前の1899年です。もちろん今日から見て文献学的な瑕疵を指摘することは容易です。けれども何という深い洞察と鋭い観察がちりばめられていることか。しかもアストンはけっして日本にいかれていません。そのことはたとえば近松を「日本のシェイクスピア」
(次頁へ続く)

学 会 ニ ュ ー ス

升 味 理 事

次期理事長に選出される

3月28日、中央大学で開かれた次期理事会において、升味準之輔理事が、満場一致で次期理事長に選出された。升味理事は、この10月の総会終了後から2年間、理事長を務めることになる。また、升味次期理事長は、半沢孝磨会員（都立大学）を次期常務理事に指名し、続いて開かれた臨時総会で承認をえた。

これに先立ち、1981年9月26日、京都大学で開かれた次期公選理事候補者による推薦理事候補者選考会の結果をふまえて、理事長が各候補者と交渉した結果、新たに14会員を推薦理事候補として総会の承認を求めることに決まり、公選理事候補者とともに3月27日の総会で次期理事（1982.10 - 1984.10）として承認された。次期理事に決まった会員の氏名は、以下の通りである。

阿 部 四 郎 （東 北 大 学）

阿 部	齊 *	（筑波大学）
有 賀	弘	（東京大学）
飯 坂	良 明 *	（学習院大学）
今 井	清 一	（横浜市立大学）
今 中	比 呂 志 *	（広島大学）
内 田	満 *	（早稲田大学）
内 山	秀 夫 *	（慶応義塾大学）
太 田	一 男	（酪農学園大学）
岡 本	宏 *	（熊本大学）
岡	俊 孝	（関西学院大学）
神 島	二 郎 *	（立教大学）
河 合	秀 和 *	（学習院大学）
喜 多	靖 郎	（近畿大学）
小 林	丈 児 *	（中央大学）
渋 谷	武	（新潟大学）
島 袋	邦	（琉球大学）
白 鳥	令 *	（独協大学）
高 畠	通 敏 *	（立教大学）
田 口	富久治 *	（名古屋大学）

とする俗見をきびしく斥けている個所だけでも明白です。彼が外交官として滞在していた幕末維新から明治前期までの日本には、まわりにペラペラ英語をしゃべるような日本人は殆どいなかったし、しかもそれは伝統的日本がおどろくべきテンポで「文明化」し変貌しつつあった日本でした。彼は、いや彼だけでなく、日本学事始における彼の僚友であったE・サトウやB・チェンバレンにしても、太古から独自のカルチャーをもった日本を理解するに際して、己れとまったく異質的な何ものかに自分は対面しているのだ、という覚悟をもち、その他者を他者として理解しようと必死になって努力したにちがひありません。それが彼等の古典翻訳や著作にあのような不滅の輝きを与える成果となったのでしょう。そうして基本的に同じことが福沢や兆民の、いや西園寺公望や伊藤博文さえもの西洋理解についてもいえるように思われます。

他者感覚—— the sense of “otherness” は、異国趣味とは全く似て非なるものです。エキゾティズムはいつてみればパンダにたいする好奇心と同じです。エキゾティックな興味はどんなに観察が微細に沈んでも、観察の結果が自分自身にはねかえって来ることはありません。それにたいし、the sense of othernessをもって対象にのぞめば、その成果はたんに対象についての情報の増大にとどまらずに、観察主体にはねかえり、自分

たちが自明のこととして使用していたコトバや概念装置がいかにか自分たちのカルチャーによって制約されていたかを自覚させる筈です。異質的な文化間の対等な相互理解への途がこうして開かれます。

世界的なコミュニケーションの発達と、とくに英語が世界語になったことによって他者感覚はどうしても稀薄化しがちです。他者感覚を喪失した、どこでも要するに大同小異なんだという一種の「普遍主義」を、私は International Airport Theory と呼ぶことにしています。国際空港ほどどこに行っても基本的に同じ構造をもち同じ恰好をしているものはありません。世界の諸文化は—— 政治文化もふくめて—— 果して国際空港のようになるのでしょうか。また個人と同じく文化も個性（特殊性でなく、！）を失って等質的になることがそれほど望ましいのでしょうか。荻生徂徠は江戸時代において、われわれが昔から読みなれている論語は日本語と全く異質的な外国語で書かれているのだ、という宣言によって同時代人に一大衝撃を与えました。けれどもそれによって中国古典の内在的理解は飛躍的に発展したのです。ツーツーカーカー的な普遍主義はかえって深い国際的相互理解を妨げるという逆説を私達は今日もう一度考えて見る必要があると思うのですがいかがでしょう。

舌足らずで失礼します。

学 会 ニ ュ ー ス

田 中 浩* (静岡大学)
 徳 本 正 彦 (九州大学)
 橋 本 彰 (明治大学)
 福 井 英 雄* (立命館大学)
 堀 江 湛* (慶応義塾大学)
 増 島 宏* (法政大学)
 升 味 準之輔* (東京都立大学)
 松 下 圭 一* (法政大学)
 三 谷 太 一 郎 (東京大学)
 三 宅 一 郎* (同志社大学)
 武者小路 公 秀 (上智大学)
 矢 野 暢 (京都大学)
 山 川 雄 己 (関西大学)
 山 口 定* (大阪市立大学)

(*印 公選理事候補者、五十音順)

1981年度研究会

中央大学で開催される

1981年度の研究会は、3月27(土)、28(日)の両日、東京・八王子の中央大学で開催された。IPSA東京ラウンド・テーブルの準備と重なるという悪条件にもかかわらず、300余名の会員の参加をえて、研究会は順調に進行し終了した。なお、研究会第1日の終了後の懇親会も、約150名の会員の参加の下に川口中大学長の歓迎の挨拶にはじまって盛大に行なわれた。研究会の議事日程で、プログラムに変更のあったのは以下の通りである。

第2日共通論題B「日本の政策決定過程をめぐっての報告」福井治弘氏(カリフォルニア大学)は行われず、その代りに渡辺昭夫氏(東京大学)が討論者に追加された。

1982年度研究会

プログラムまとまる

1982年度の研究会(1982年10月16、17日、近畿大学)のプログラムがほゞまとまり、3月27日の理事会で三宅企画委員長より報告された。その内容は以下の通りである。(テーマはいずれも仮題)

なお、第1日の研究会終了後、懇親会が開かれる予定である。

第1日 10月16日(土)

研究会(午前)

共通論題 A 「都道府県レベルの政治」

司会 阿利 莫二 (法政大学)

報告 松下 圭一 (法政大学)

島袋 邦 (琉球大学)

村松 岐夫 (京都大学)

中村 宏 (島根大学)

研究会(午後)

分科会 A 「リーダーシップ論—社会心理学と政治学—」

司会 木下 富雄 (京都大学)

報告 三隅二不二 (大阪大学)

的場 敏博 (京都大学)

討論 田中善一郎 (東京大学) 他一人未定

分科会 B 「文革後中国の政治と外交」

司会 岡部 達味 (東京都立大)

報告 高木誠一郎 (埼玉大)

小島 朋之 (京都産大)

討論 川島 弘三 (防衛大)

後藤 峯雄 (関西学院大)

分科会 C 「政治思想における古代と近代」

司会 佐々木 武 (東京医歯大)

報告 佐々木 毅 (東京大学)

藤原 保信 (早稲田大)

討論 有賀 弘 (東京大学) 一人未定

第2日 10月17日(日)

研究会(午前)

共通論題 B 「フランスの社会主義政権」

司会 西川 知一 (神戸大学)

報告 平田 清明 (京都大学)

舛添 要一 (東京大学)

J. M. Bouisson (日仏学館)

研究会(午後)

分科会 D 「政策決定の諸問題」

司会 山川 雄己 (関西大学)

報告 山本 吉宜 (埼玉大学)

猪口 孝 (東京大学)

討論 進藤 栄一 (筑波大学)

片井 修 (京都大学工学部)

分科会 E 「ネオ・コーポラチズム」

司会 山口 定 (大阪市立大)

報告 辻中 豊 (北九州大)

学 会 ニ ュ ー ス

加藤 哲郎 (一橋大)
 討論 田口富久治 (名古屋大) 一人未定
 分科会 F「天皇制国家の臣民教育」
 司会 西田 毅 (同志社大)
 報告 伊藤 弥彦 (同志社大)
 高橋 真司 (長崎総合大)
 討論 松沢 弘陽 (北海道大)
 尾崎ムゲン (大阪女子大)

1982年度予算承認される

3月27日に中央大学において行われた理事会において1982年度予算が承認された。その費目別内訳は別表のとおりである。

年報政治学1980

『政治学と隣接諸科学の間』

刊行される

1980年度の日本政治学会年報(年報委員長・脇圭平)は、4月8日発売された。その主な内容は以下の通りである。

政治学と隣接諸科学の間

— その交渉の現状と課題 —

(岩波書店刊、3,300円)

はしがき	脇 圭平
I 政治学における科学と哲学	小野 修
II 政治社会学と政治経済学	田口富久治
III 経済理論と政治学	蒲島 郁夫
IV 政治学とサイバネティクス	山川 雄巳
V 地域研究と政治学	矢野 暢
VI 生活形式と政治思想	蔭山 宏
VII ファシズム・「近代化」・「全体主義」	山口 定

学界展望— 1979年—

学会報告

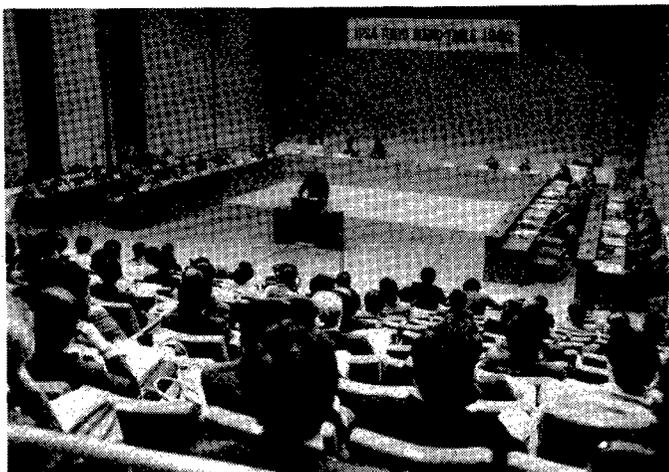
なお年報政治学1981「現代国家の位相と理論」(年報委員長・内山秀夫)は本年9月刊行の予定である。

1982年度予算		
	項 目	金 額 (円)
収入	1. 前年度よりの繰越し	1,022,000
	2. 会 費 収 入	2,300,000
	3. 雑 収 入	5,000
	4. 年報特別基金返済	0
	5. IPSA R.T特別基金返還	1,000,000
	収 入 合 計	4,327,000
支出	1. 研 究 会 開 催 費	680,000
	研究会準備金	500,000
	報告者謝礼	180,000
	2. 委 員 会 経 費	255,000
	年報委員会	55,000
	企画委員会	85,000
	文献委員会	65,000
	渉外委員会	50,000
	選挙管理委員会	0
	3. 理 事 会 経 費	40,000
	4. 学 会 分 担 金 (IPSA)	263,000
5. 事 務 局 経 費	500,000	
	理事長通信費	20,000
	運 営 費	30,000
	人 件 費	200,000
経 常 費	250,000	
6. 名 簿 作 成 積 立 金	100,000	
7. I P S A 関 係 積 立 金	20,000	
8. 選 挙 管 理 費	0	
9. 年 報 特 別 基 金	300,000	
10. 会 報 発 行 費	230,000	
11. 予 備 費	1,939,000	
	支 出 合 計	4,327,000
	収 支 差 引	0

IPSA TOKYO ROUND TABLE 1982

IPSA東京ラウンド・テーブル 成功裡に閉幕

日本政治学会と世界政治学会が共同で主催し、国連大学と日本学術会議が後援する国際ラウンド・テーブル政治研究集会「アジア・太平洋における政治発展と新国際経済秩序」は、3月29日（月）より4月1日（木）までの4日間、東京・駒場の国民年金中央会館（“こまばエミナース”）において開催された。ラウンド・テーブルの構成参加者は、世界政治学会執行委員18名をふくめて、海外28か国より36名、国内より19名、総計55名の多きに達した。またこの他に海外よりの特別



傍聴者として5か国より7名が参加した。会議の一般傍聴席はおよそ250設けられたが、4日間を通じてほとんど満席の盛況であった。

会議は、第1日の開会式のあと順調に進行し、最終日のアプター教授による閉会の辞につづく辻組織委員長の挨拶、メンデスIPSA会長の謝辞でつつがなく終了した。この間、3月29日午後6時から組織委員会主催のレセプションが国民年金中央会館で、また3月31日午後6時30分から外務次官主催のレセプションが飯倉会館で開催され、海外よりの参加者と日本の政治学界その他関係各界との交流が深められた。また最終日の会議終了後、海外参加者一同は一刻浅草に遊び、築地・治作で和食による慰労パーティを楽しみ、疲れをいやした。なお、会議の期間中、海外参加者同伴者（6名）のために、希望に応じた案内や見学のプログラムが組まれた。

東京でのラウンド・テーブル終了後、4月2日、毎外参加者有志35名（夫人をふくむ）は、組織委員会の招待による関西への一泊旅行に出かけ、春の京都を楽しんだ。なお、京都においては、関西在住の会員による歓迎レセプションが4月2日、午後6時より京都・東山の楠荘で開催された。また4月3日午後1時から京都外国語大学で「現代世界と政治学——東の視点・南の視点——」と題する講演会が開催され、C・メンデスIPSA会長、A・ビビッチIPSA執行委員による講演が行なわれた。

会議の終了後今日まで、C・メンデスIPSA会長による“paramount in the 33 years of IPSA history”という電報をはじめとする多くの謝辞が、組織委員会事務局あてに送られてきている。

また、ラウンド・テーブル開催に先立ち、3月27日（土）より2日間、世界政治学会の執行委員会が、東京・六本木の国際文化会館で開かれた。日本政治学会理事会は、世界政治学会執行委員会の訪日を歓迎して、同所において3月28日（日）午後6時30分よりレセプションを開き、相互交流に努めた。

ラウンド・テーブルの議事日程は、以下の通りである（プログラムに若干訂正）。また、会議の内容や反響について、主要新聞紙上で報道された記事が本会報の付録として収録されている。

〔議事日程〕

第1日＝3月29日（月）

開会式（11:00 AM～12:00 AM）

司会 ジョン・E・トレント＝世界政治学会事務局長
武者小路公秀＝ラウンド・テーブル組織委員会事務局長

開会の辞 辻 清明＝ラウンド・テーブル組織委員会委員長

挨拶 カンディド・メンデス＝世界政治学会会長
神島二郎＝日本政治学会理事長

祝辞 岡倉古志郎＝日本学術会議副会長
永井道雄＝国連大学学長特別顧問

基調演説（1:30 PM～5:30 PM）

司会 C・A・ベルマル＝マドラス大学教授
升味準之輔＝東京都立大学教授

基調講演 「世界の政治的・経済的発展の長期的展望」
カール・ドイッチュ＝ハーバード大学教授
「政治発展の理論と現実」 スジャトモコ＝

IPSA TOKYO ROUND TABLE 1982

国連大学学長
 「発展、主権国家および世界秩序の歴史的展望」 福田歓一＝東京大学教授
 補充講演 ゲオルギー・シャフナザーロフ＝ソ連政治学会会長
 都留重人＝国際経済学会前会長

第2日＝3月30日(火)

第1セッション “政治発展の新しいデザインを求めて”
 (9:30 AM-12:30 PM)

司会 イェジイ・ヴィアトル＝ワルシャワ大学教授
 綿貫謙治＝上智大学教授

報告 「権威主義的体制から民主主義的体制への移行」 ファン・J・リンス＝イエール大学教授

「戦後日本の政治発展」 L・S・ラトール＝シヨドポール大学教授

「政治発展研究における日本経験の意味」

石田 雄＝東京大学教授

討論者 山口 定＝大阪市立大学教授

カール＝ハイッツ・レーダー＝東独政治学会副会長

第2セッション “政治指導と国益”

(2:00 PM-5:00 PM)

司会 ランドルフ・ダヴィッド＝フィリピン大学教授
 矢野 暢＝京都大学教授

報告 「スハルト体制の政治的特質」 ベネディクト・R・アンダーソン＝コーネル大学教授

「政治指導、政治制度および社会の未来像－タイの政治発展プログラム」 リキッド・ディラヴェギン＝タマサート大学教授

「“国家利益”概念組み換えの試み＝中国における内発的発展の可能性」 宇野重昭＝成蹊大学教授

討論者 岡部達味＝東京都立大学教授

加茂雄三＝青山学院大学教授

第3日＝3月31日(水)

第3セッション “軍事力の拡散と新国際経済秩序”

(9:30 AM-12:30 PM)

司会 ディーター・ゼンガース＝ブレーメン大学教授
 宮里政玄＝琉球大学教授

報告 「軍事化と新しい国際的アナーキー」 ロビン・ラッカム＝ガーナ大学教授

「第三世界非軍事化の展望」 リム・テック・ギー＝マレーシア大学教授

「長期的な紛争状況における動員と軍事化－朝鮮半島の場合」 ハン・バエホー＝高麗大学教授

討論者 山本 満＝法政大学教授

エルジン・エズブドゥン＝アンカラ大学教授

第4セッション “国家間の政治的経済的依存関係”

(2:00 PM-5:00 PM)

司会 ラジニ・コターリ＝デリー大学教授

馬場伸也＝津田塾大学教授

報告 「依存と自立の間の内発化戦略」 バク・スンジョ＝ベルリン自由大学教授

「強国と弱国間の相互依存」 キエン・テラヴィット＝チュラロンコン大学教授

「相互依存と道徳秩序－中国の歴史的体験」

ワン・グング＝オーストラリア大学教授

討論者 進藤栄一＝筑波大学教授

鈴木佑司＝前マレーシア大学教授

第4日＝4月1日(木)

第5セッション “新しい国際秩序を求めて”

(9:30 AM-12:30 PM)

司会 チャン・ヘン・チー＝シンガポール大学教授
 坂本義和＝東京大学教授

報告 「世界秩序研究と世界システム」 リチャード・フォーク＝プリンストン大学教授

「新国際秩序は流行のスローガンか可能な戦略か」 タマス・ジェンテス＝ブタペスト・マルクス経済大学教授

「従属から新国際経済秩序へ－ラテン・アメリカの視点」 ベドロ・エンリケス＝国連大学プログラム主任

討論者 高柳先男＝中央大学教授

武者小路公秀＝国連大学副学長

討論総括 閉会(2:00 PM-3:00 PM)

司会 アッシャー・アーリアン＝テルアビブ大学教授
 内山秀夫＝慶応義塾大学教授

討論総括 各セッション司会者

閉会の辞 デビッド・アプター＝イエール大学教授

上記以外のラウンド・テーブル構成参加者

アドルフ・ビビッチ＝エドワルド・カルデリ大学教授

ダニエル・フライ＝チューリッヒ大学教授

ジャック・ヘイワード＝ハル大学教授

フリオ・ポルティージョ＝カラカス・F・デ・ミランダ大学教授

セルジュ・ユルティク＝フランス・政治研究院事務総長

IPSA TOKYO ROUND TABLE 1982

ジョン・マイゼル＝カナダ放送通信委員会委員長
フランセスコ・ヒェルベルク＝オスロ大学教授
リチャード・メリット＝イリノイ大学教授
リー・シェンチー＝中国社会科学院アメリカ研究所長
海外特別傍聴参加者
デビッド・アプター＝イエール大学教授
クラウス・フォン・バイメ＝ハイデルベルク大学教授
ジャン・ラボンス＝ブリティッシュ・コロンビア大学教授
カルロス・H・カルディム＝ブラジリア大学教授
ジャンピエール・ガブリー＝オタワ大学准教授
ギエルモ・オドンネル＝ブラジル社会科学研究所長
ウィリアム・スミルノフ＝ソビエト政治学会事務局長

IPSA東京ラウンド・テーブルへの 会員募金、574万5千円に

IPSA東京ラウンド・テーブルへの会員募金は、その後増えつづけ、総額で574万5千円に達した。前回報告後、寄付して頂いた会員の名前は、以下の通りである。

IPSA円卓会議基金

募金者名簿（1981.9.28、五十音順）

相原良一、秋山和宏、飯坂良明、伊藤重行、伊藤昭一郎、岩野弘一、内田繁隆、大石紘一郎、岡 俊孝、岡本順一、小笠原弘親、奥深山親司、掛川トミ子、北川 均、木村良一、栗原 彬、佐竹 寛、佐野泰彦、島袋 邦、砂田一郎、竹尾 隆、富沢 克、長井信一、中沢精二郎、中村研一、中村五郎、永森誠一、成田博之、西川知一、西原森茂、ロバート・パークス、橋本信之、坂野潤治、藤城和美、松岡 泰、三谷太一郎、山本吉宣、吉岡知哉、ロイ・ロックハイマー、脇 圭平、和田 守、渡辺保男

一般募金も順調に

総額2800万円に達す

資金委員会による一般募金活動も順調に進み、目標とされていた2,660万円をこえて2,800万円に達する予定であることが明らかになった。この他、大学・研究所、財団・協会などに対する募金も順調に終了した。募金に応じて下さった団体および企業は下記の通りである。

る。
〔大学・研究所関係〕 慶応義塾大学、中樞行政研究所、法政大学、早稲田大学、立教大学。なお国連大学からは、海外参加者の費用について分担援助をうけている。
〔新聞・出版関係〕 朝日新聞社、岩波書店、共同通信社、中央公論社、読売新聞社
〔一般企業〕 イセト紙工株式会社、伊藤忠商事株式会社、大阪瓦斯株式会社、大阪三菱ふそう自動車販売株式会社、株式会社京都銀行、株式会社西武百貨店、株式会社ダイエー、株式会社電通、株式会社日立製作所、株式会社明電舎、株式会社安川電機製作所、株式会社ワコール、関西電力株式会社、京都信用金庫、サントリー株式会社、三洋電機株式会社、生命保険協会、ダイキン工業株式会社、大正海上火災保険株式会社、太陽工業株式会社、立石電機株式会社、中部電力株式会社、東京銀行協会、東京芝浦電気株式会社、東京電力株式会社、東証正会員協会、東武鉄道株式会社、トヨタ自動車工業株式会社、トヨタ自動車販売株式会社、日産自動車株式会社、日本建設業団体連合会、日本新薬株式会社、日本損害保険協会、日本鉄鋼連盟、富士電機製造株式会社、ぺんてる株式会社、松下電器産業株式会社、三菱電機株式会社。

（五十音順）

なお、この他、サントリー株式会社、ぺんてる株式会社より、それぞれ製品の寄贈をうけている。

また、株式会社日本航空からも別途援助を受けた。

〔財団・基金・協会関係〕

日本学術振興会、日本万国博覧会記念協会、ユネスコ本部。この他、国際交流基金からも、海外参加者の旅費について援助を受けている。

なお、ラウンド・テーブル開催についての収支の明細は、監事と公認会計士の監査をへたのち、次号の会報で明らかにされる予定である。

総会・理事会の記録から

〔理事会〕— 1981年12月5日 立教大学

○山川年報委員長から1983年度年報委員が次のように決った旨、報告があった。(五十音順)

猪口 孝、内田 満、大獄 秀夫、進藤 栄一
橋本 信之、平井 友義、松下 圭一、三宅 一郎
山川 雄巳、山口 定、山本 吉宣、若田 恭二

〔理事会〕— 1982年3月27日 中央大学

○1983年度研究会開催校について協議が行なわれ、早稲田大学を第1候補とすることとした。

○本年8月、リオ・デ・ジャネイロで行なわれるIPSA世界大会への日本政治学会よりの代表派遣について、日本学術会議より、神島二郎研究連絡委員に対し旅費支給の通知があった旨、神島理事長より報告があった。なお、現実はこの旅費を使用してIPSA世界大会に派遣する会員の問題については、最近の学術会議出張旅費問題についての動向を見きわめた上、神島理事長あるいは次期渉外委員長とすることと決定された。

〔総会〕— 1982年3月27日 中央大学

○神島理事長より、投票により選出された理事および理事選考委員会により推薦された理事が紹介され、1982～84年度・次期理事として承認された。

○神島理事長より、1981・82年度予算が理事会で承認されたこと、また年報・企画・文献各委員会の進行状況およびIPSA東京ラウンド・テーブルの開催について報告があった。また、川口監事より、1980年度決算の監査を終了した旨、報告があった。

〔次期理事会〕— 1982年3月28日 中央大学

○升味次期理事が満場一致で次期理事長に選出された。

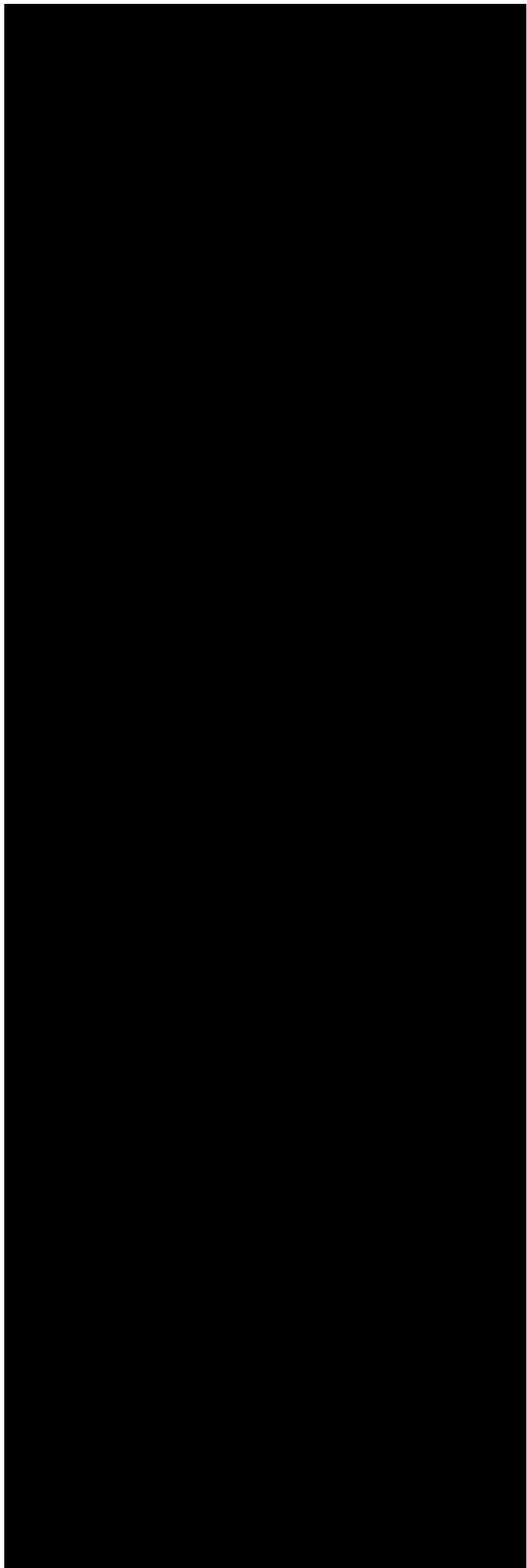
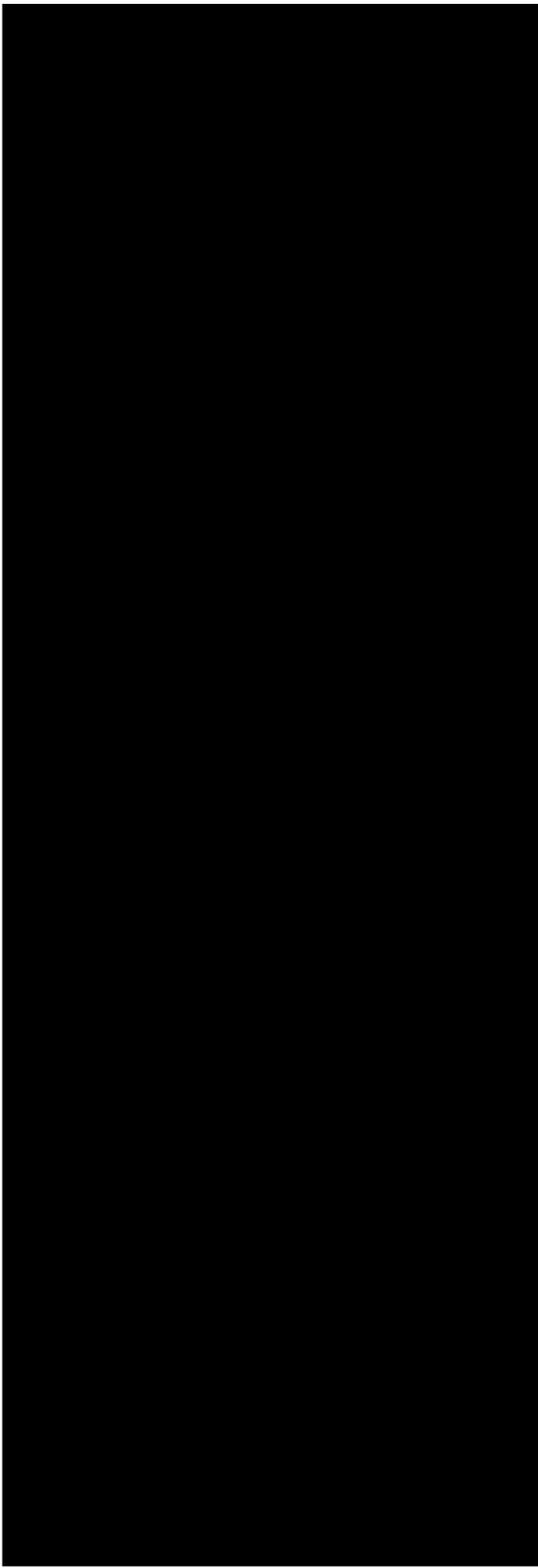
○升味次期理事より、次期理事長受諾のあいさつの後、次期常務理事として半沢孝磨会員を推したい旨提案があり、本日の臨時総会に推薦し承認を求めらることに意見の一致を見た。

○神島理事長より、慣例に従い次期理事を辞退したい旨申出があり、了承された。

〔臨時総会〕— 1982年3月28日 中央大学

○神島理事長より、次期理事会において升味理事が次期理事長に選出された旨、報告があった。

○おなじく、次期理事長により次期常務理事として半沢孝磨会員が推薦され、次期理事会の承認をえた旨報告があり、同会員を理事に追加することが承認された。また、次期理事会において神島理事長の次期理事辞退が承認された旨、報告があった。



8月14日(土)夜 リオ出発
8月15日(日)昼 リマ(ペルー)到着
　　<リマ・クスコ観光、マチュピチュ遺跡見学>
8月19日(木)昼 リマ出発
8月20日(金)夜 東京到着
　　全行程、日本人添乗員・ガイド付き

〔費用〕

898,000円(ホテル・朝食代、ガイド費込み)
　　<東京-リオ直行航空運賃は往復 793,700円>
　　ただし、15人以上が同一行程で旅行する場合にかぎる。

〔申込〕

阪急旅行社・国際会議グループ(東京都港区新橋3-3-9、阪急交通社ビル内、TEL 03-508-0129)へ6月20日までに。なお、ツアーの詳細については、上記に直接お問い合わせ下さい。

会費納入のお願い

1982年度の会費(3,500円)をお送り頂くようお願いいたします。同封の郵便振替用紙で御送金下さい。なお中央大学の研究会ですでに払込まれた方には、振替用紙は同封されていません。また1980年度以前の会費を滞納されている方は、規約第8条および理事会の申合せにより、6月末日で会員名簿から名前をはずさせて頂きますので御了承下さい。

編 集 後 記

IPSA東京ラウンド・テーブルの残務整理と重なって、会報の発行が遅れました。本号は、IPSA組織委員会の財政援助をえて増ページし、各新聞紙上での報道を付録として折り込みました。なお巻頭の丸山真男会員の文章は、ラウンド・テーブル歓迎レセプションに用意された御挨拶で、時間の都合上省略された部分をあらためて書いて頂いたものです。

事 務 局 か ら

IPSA世界大会(リオ・デ・ジャネイロ) ツアーのお知らせ

本年8月9日より8月14日まで、リオ・デ・ジャネイロで開催されるIPSA第12回世界大会に日本から参加される方のために、阪急旅行社では以下のようなツアーの企画をつくりました。通常の料金で単独で旅行される場合に較べて、はるかに格安な料金になっています。ふるってご参加下さい。

〔日程〕

8月6日(金)夕 東京出発
8月7日(土)朝 リオ到着
　　<リオ観光・世界大会(9~14日)出席>

1982年5月28日

編集 日本政治学会会報編集委員会
　　(代表 高 島 通 敏)
発行 日本政治学会事務局
　　〒171 東京都豊島区西池袋3丁目
　　立教大学法学部研究室
　　TEL 03(985)2561